

# 教育研究業績書

2016年10月01日

所属：薬学科

資格：講師

氏名：三浦 健

|               |                       |
|---------------|-----------------------|
| 研究分野          | 研究内容のキーワード            |
| 生物薬学、薬理学、薬学教育 | 生化学、末梢神経薬理学、薬学教育学     |
| 学位            | 最終学歴                  |
| 博士（薬学）        | 大阪大学大学院薬学研究科博士前期課程 修了 |

| 教育上の能力に関する事項              |            |   |
|---------------------------|------------|---|
| 事項                        | 年月日        | 概要  |
| <b>1 教育方法の実践例</b>         |            |   |
| 1. 自習習慣の定着                | 2016年～現在   | ラーニングポートフォリオを学生に実施し、毎講義においてそれをルーブリックで自己評価させることで、学生のメタ学習に関するreflectionを誘導した。   |
| 2. 自学復習を促す工夫              | 2015年4月～現在 | 中間テスト後に、解答や総評、学年全体の弱点などをμCam上に公表し、それを基に中間テスト範囲を自学復習するように促した。  |
| 3. 自習習慣の定着                | 2014年～現在   | 自習の習慣を定着させるために、講義内容に関するノートの整理を講義時間外に行うことを義務付け、講義ごとにすべての学生のノートを確認した。また、ノートの整理を通して、講義内容の知識の定着を図った。  |
| 4. 自習習慣の定着                | 2014年～現在   | 次回講義までの勉強計画を立てさせ、それにのりつた自習を促した。特に、勉強のステップを「理解する」「整理する」「覚える」と分類し、それぞれのステップに関して勉強計画を立てさせることにより、単純に暗記をするのでは不十分であることを印象づけた。また、反省点や改善点を記載させることで、勉強習慣のPDCAサイクルを意識させた。   |
| 5. Webを利用した双方向型授業の実施      | 2014年～現在   | レポートをμCamの掲示板に提出させた。提出しなければ掲示板を閲覧できない設定としたため、掲示板へレポートを提出した後は他の提出レポートの内容を確認することが可能であり、これによって学習意欲の向上を図った。また、教員がそれぞれのレポート内容についてコメントを行い、学生にフィードバックを行ったり、掲示板での討議を実施した。 |
| 6. 質疑応答による評価              | 2014年～現在   | 実習科目に関して、知識に裏付けられた技能が習得できているのかを質疑応答における学生の反応により評価した。  |
| 7. 双方向型の授業実施              | 2014年～現在   | レポート形式の宿題を課し、学生の習熟度を確認するとともに、必要に応じて学生へフィードバックし、双方向型の授業を実施した。  |
| 8. 双方向型の授業実施              | 2014年～現在   | 講義後半の講義内容の円滑な導入のために、中間テストにおける低習熟度学生を対象に補習を行った。講義の復習を行うための教材を自習してもらった後、複数回のミニテストを行い、ミニテスト後には机間指導にて学生と1対1で講義内容に関して討議を実施した。  |
| 9. 双方向型の授業実施              | 2014年～現在   | 講義の進行度合いや学生の状況を考慮に入れながら、講義の途中に5分程度の復習時間を設置した。この時間内に教員が机間指導を行い積極的に質問対応するとともに、学生は講義内容の整理を行った。講義内容の理解を深めるとともに、受講態度の改善に結びついている。                                       |
| 10. 双方向型の授業実施             | 2014年～現在   | 毎講義の冒頭に前回講義に関する小テストを実施し、正答率の低い問題に関してはその場で追加の説明を行うなど、学生の理解度に合わせた双方向型の講義を実施した。また、その解答用紙には、教員へのコメント欄を作成し、講義内容に関する改善点を抽出し、可能な限り即時対応を行った。                              |
| 11. 双方向型の授業実施             | 2014年～現在   | 習熟度別講義における低習熟度学生対象の少人数編成クラスを担当した。授業内では学生を指名し発表する機会を与えることで、双方向対話型授業を実施し、受講態度の改善を図った。   |
| <b>2 作成した教科書、教材</b>       |            |   |
| 1. 基礎生物 補助教材・知識確認集        | 2015年～現在   | 学生が薬学生物学の健全な生命観を得ることができるように、絵をふんだんに盛り込んだ視覚的に理解できる補助教材を作成した。また、講義などで得た知識を定着しているのか自己確認できるように、練習問題集を作成した。  |
| 2. 薬の作用2 補助教材・知識確認集       | 2014年～現在   | 低習熟度の学生が効率的に知識を確認することができるように、講義のトピックを中心としたまとめ用の補習教材を作成した。また、学生がより深い知識を得ることができるように、当該領域の最新の動向を考慮したオリジナル問題を含む300問以上の知識確認集を作成した。                                     |
| 3. 生命活動を担うタンパク質 補助教材・知識確認 | 2014年      | 学生がタンパク質の化学的性質をより深く理解できるよ   |

| 教育上の能力に関する事項   |                     |  |
|--|---------------------|--|
| 事項   | 年月日                 | 概要   |
| <b>2 作成した教科書、教材</b>  |                     |  |
| 集  |                     | うに、絵や演習課題をふんだんに盛り込んだ視覚的に理解できる補助教材を作成した。また、講義などで得た知識を定着しているのか自己確認できるように、練習問題集を作成した。 |
| <b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>                                 |                     |  |
| 1. 薬学実務実習  | 2005年12月～2008年      | 日本病院薬剤師会認定実務実習指導薬剤師（第00127号）として、薬学実務実習の一部を担当した。                                    |
| <b>4 その他</b>   |                     |  |
| 1. 高校での分野別理解説明会  | 2015年12月15日         | 和歌山県立那賀高等学校において分野別理解説明会（薬学）の講師を担当した。   |
| 2. 第19回全国薬学教育者ワークショップ近畿（厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ）に参加 | 2006年8月5日～2006年8月6日 | 摂南大学において、第19回全国薬学教育者ワークショップ近畿（厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ）に参加した。              |

| 職務上の実績に関する事項   |                       |  |
|--|-----------------------|--|
| 事項   | 年月日                   | 概要   |
| <b>1 資格、免許</b>                                       |                       |  |
| 1. 日本救急医学会ICLSコース修了                                  | 2014年9月13日            | コース認定番号：1427170  |
| 2. 日本救急医学会BLSコース修了                                   | 2014年6月22日            | コース認定番号：1427129  |
| 3. (財)日本アンチ・ドーピング機構 公認スポーツファーマシスト                    | 2012年4月               | 12-270052  |
| 4. (財)日本薬剤師研修センター認定薬剤師                               | 2009年4月               | 第09-37042  |
| 5. 日本病院薬剤師会認定実務実習指導薬剤師                               | 2005年12月～2010年3月      | 第127号  |
| 6. 薬剤師免許   | 2004年8月               | 第389073  |
| 7. 高等学校教諭専修免許状（理科）                                   | 2004年3月               | 平15高専第02124号   |
| <b>2 特許等</b>   |                       |  |
| <b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>                         |                       |  |
| <b>4 その他</b>   |                       |  |
| 1. 第83回 認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ（薬学教育者ワークショップ） in 近畿 | 2016年9月3日～2016年9月4日   | 武庫川女子大学で開催された第83回 認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ（薬学教育者ワークショップ） in 近畿において、タスクフォースとして活動した。 |
| 2. 第82回 認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ（薬学教育者ワークショップ） in 近畿 | 2016年8月6日～2016年8月7日   | 立命館大学で開催された第82回 認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ（薬学教育者ワークショップ） in 近畿において、タスクフォースとして活動した。   |
| 3. 第80回 認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ（薬学教育者ワークショップ） in 近畿 | 2015年9月20日～2015年9月21日 | 神戸薬科大学で開催された第80回 認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ（薬学教育者ワークショップ） in 近畿において、タスクフォースとして活動した。  |
| 4. 第76回 認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ（薬学教育者ワークショップ） in 近畿 | 2015年2月21日～2015年2月22日 | 大阪大谷大学で開催された第76回 認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ（薬学教育者ワークショップ） in 近畿において、タスクフォースとして活動した。  |
| 5. 「武庫川女子大学薬学部 薬学教育推進センター年報 2014年度」の編集               | 2015年                 | 武庫川女子大学薬学部薬学教育推進センターの発足1年目の活動報告書である「武庫川女子大学薬学部 薬学教育推進センター年報 2014年度」の編集を行った。        |

| 研究業績等に関する事項   |         |              |                                      |  |
|---|---------|--------------|--------------------------------------|--|
| 著書、学術論文等の名称   | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月    | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称                    | 概要   |
| <b>1 著書</b>   |         |              |                                      |  |
| 1. ニトログリセリンとお酒の意外な関係（バイオメディア）                                   | 単       | 2007年10月     | 生物工学会誌                               | 三浦健  |
| <b>2 学位論文</b>   |         |              |                                      |  |
| <b>3 学術論文</b>   |         |              |                                      |  |
| 1. 薬理学教育に対する解剖生理学領域における低習熟度学生対象教育の効果（査読付）                       | 共       | 2016年12月刊行予定 | 薬学雑誌                                 | 本学で行っている低学年習熟度別講義の中の解剖生理学に関して、並行して開講されている薬理系講義に与える影響を解析した。解剖生理学にて低習熟度クラスで強化教育を受けている学生は、薬理系講義においても良い影響があることを明らかにした。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。北山友也*、籠田智美、吉川紀子、河井伸之、西村奏咲、三浦健、安井菜穂美、篠塚和正、中林利克 |
| 2. Renoprotective effect of yohimbine on ischemia/reperfusion-i | 共       | 2016年刊行予定    | European Journal of Pharmacology 印刷中 | ラット腎虚血再灌流モデルにおいて、アドレナリンα2受容体阻害薬であるヨヒンビンの前処置により、  |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称   | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称   | 概要   |
|---|---------|-----------|---|--|
| <b>3 学術論文</b>   |         |           |   |  |
| duced acute kidney injury through alpha2C-adrenoreceptors in rats (査読付)   |         |           |   | 有意に腎障害を軽減することを見出した。つまり、虚血性の腎障害進展に $\alpha 2$ 受容体刺激が関与することを明らかにした。関与する $\alpha 2$ 受容体のサブタイプに関して、選択的阻害薬を用いた薬理的解析により $\alpha 2c$ 受容体の寄与が大きいことを明らかにした。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。<br>Takaomi Shimokawa*, Hidenobu Tsutsui, Takeshi Miura, Toru Nishinaka, Tomoyuki Terada, Masashi Takama, Shuhei Yoshida, Takao Tanba, Ayumi Tojo, Masayo Yamagata, Tokihito Yukimura |
| 3. Up-regulation of carbonyl reductase 1 renders development of doxorubicin resistance in human gastrointestinal cancers. (査読付)                 | 共       | 2015年9月   | Biological and Pharmaceutical Bulletin 38 (2015) 1309-1319. | ドキシソルビシンに対して薬剤耐性化させたMKN45細胞とLoVo細胞では、薬物代謝酵素CBR1の発現が上昇していた。また、CBR1の機能を抑制するとドキシソルビシン耐性が一部解除されることから、ドキシソルビシン耐性化にはCBR1が寄与していると推測される。この耐性化には、CBR1によるドキシソルビシン代謝の促進よりは、細胞傷害性アルデヒド類に対する代謝促進が関与していると考えられる。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。   |
| 4. Synthesis of 8-hydroxy-2-iminochromene derivatives as selective and potent inhibitors of human carbonyl reductase 1 (査読付)                    | 共       | 2015年7月   | Organic and Biomolecular Chemistry 13 (2015) 7487-7499.     | 薬物代謝酵素CBR1は、アントラサイクリン系抗がん薬の13位を還元する。代謝産物は、アントラサイクリン系抗がん薬に特有の副作用である心不全の原因とされている。一連の化合物のCBR1への阻害活性を測定したところ、 $K_i$ 値が15 nMと強力であり、かつ、CBR1に選択性の高い新規化合物を同定した。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。   |
| 5. Identification of a functional antioxidant responsive element in the promoter of the Chinese hamster carbonyl reductase 3 (Chcr3) gene (査読付) | 共       | 2015年7月   | Cell Biology International 39 (2015) 808-815.               | 著者らが同定したチャイニーズハムスターCBR3(CHCR3)遺伝子の転写制御を解析する目的で、当該遺伝子の転写制御領域DNA配列を、5'-RACE法およびGenome Walking法にて新規に同定した。この配列はTATA-lessかつGC-richなものであり、その配列中にAnti-oxidant responsive element (ARE)を見出した。Luciferase gene reporter assayの結果、このAREが十分に機能的であることを見出した。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。  |
| 6. Down-regulation of aldo-keto reductase AKR1B10 gene expression by a phorbol ester via the ERK/c-Jun signaling pathway (査読付)                  | 共       | 2015年6月   | Chemico-Biological Interactions 234 (2015) 274-281.         | がん組織において発現が上昇するAKR1B10遺伝子の転写制御機構に関して解析を行った。A549細胞に、強力な発がんプロモーターであるTPAを処理することによってAKR1B10遺伝子の転写活性化能の増強がみられた。これはERK/c-Jun経路を介することを明らかにした。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。  |
| 7. Structure-activity relationship of flavonoids as potent inhibitors of carbonyl reductase 1 (CBR1) (査読付)                                      | 共       | 2015年3月   | Fitoterapia 101 (2015) 51-56.                               | 薬物代謝酵素CBR1はアントラサイクリン系抗がん薬の代謝に関与しており、その代謝産物はアントラサイクリン系抗がん薬に特有の副作用である心不全の原因の1つとされている。副作用軽減を狙う薬物を探索する目的で、CBR1に対して阻害活性を示すフラボノイド類をスクリーニングしたところ、luteolinを見出した。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。  |
| 8. Regulation of human carbonyl reductase 1 (CBR1, SDR21C1) gene by transcription factor Nrf2 (査読付)   | 共       | 2013年2月   | Chemico-Biological Interactions 202 (2013) 126-135.         | 薬物代謝酵素CBR1の生理的役割を明らかにすることを目的に、CBR1の転写制御機構を検討した。複数種の化合物に対して、CBR1遺伝子の転写制御領域の転写活性能に対して影響を与えるかを検討したところ、BHAが正に転写を制御することを見出した。さらに、BHAによる転写促進は、転写因子Nrf-2とAnti-oxidant responsive elementを介していることを明らかにした。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。   |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称  | 単著・<br>共著書別 | 発行又は<br>発表の年月 | 発行所、発表雑誌等<br>又は学会等の名称   | 概要   |
|--|-------------|---------------|---|--|
| <b>3 学術論文</b>  |             |               |   |  |
| 9. Reduction of cytotoxic p-quinone metabolism of tert-butylhydroquinone by human Aldo-ketoreductase (AKR) 1B10. (査読付)   | 共           | 2012年10月      | Drug Metabolism and Pharmacokinetics 27 (2012) 553-558.           | 食品添加物として用いられる抗酸化物質2-tert-Butylhydroquinone (BHQ)の代謝産物の一部は染色体異常を引き起こす。この代謝産物に対する代謝酵素を探索したところ、AKR1B10が最も効率の良い酵素であった。培養細胞を用いた系においても同様に実証された。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。<br>Toshiyuki Matsunaga*, Satoshi Endo, Mayuko Take-mura, Midori Soda, Keiko Yamamura, Kazuo Tajima, Takeshi Miura, Tomoyuki Terada, Ossama El-Kabani, Akira Hara  |
| 10. Regulation of Aldo-keto reductase AKR1B10 gene expression: involvement of transcription factor Nrf2. (査読付)   | 共           | 2011年5月       | Chemico-Biological Interactions 30 (2011) 185-191.                | AKR1B10は非小細胞肺癌や肝がん発現の上昇が見られる酸化還元酵素である。A549細胞よりこの転写制御領域をクローニングした。Luciferase gene reporter assayにより、ethoxyquinがAKR1B10転写活性化能を上昇することを明らかにした。さらに、この上昇は、転写因子Nrf-2が関与していることを見出した。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。<br>Toru Nishinaka*, Takeshi Miura, Manami Okumura, Fumika Nakao, Haruka Nakamura, Tomoyuki Terada   |
| 11. Site-directed mutagenesis of rat thioltransferase: effects of essential cysteine residues for the protection against oxidative stress. (査読付)                                       | 共           | 2010年2月       | Journal of Biochemistry and Molecular Toxicology 24 (2010) 60-65. | ラットthioltransferaseをクローニングし、大腸菌発現により組換えラットthioltransferaseタンパク質を得た。その機能性について検討したところ、Cys 23とCys26が酵素活性の発現に必須であることを見出した。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。<br>Tomoyuki Terada*, Kei-ichi Okamoto, Junichi Nishikawa, Takeshi Miura, Toru Nishinaka, T Nishihara   |
| 12. Importance of the substrate-binding loop region of human monomeric carbonyl reductases in catalysis and coenzyme binding. (査読付)  | 共           | 2009年8月       | Life Sciences 85 (2009) 303-308.                                  | 薬物代謝酵素CBR1に高度に類似した新規酵素CBR3は、CBR1に比べて極めて限定的な還元酵素活性を示すことが明らかにされていた。この機構を明らかにするために、種々のキメラ酵素を作成しその酵素活性を測定したところ、基質結合ループ領域のswappingにより還元酵素活性や補酵素への結合能もswapされることを見出した。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。<br>Takeshi Miura*, Toru Nishinaka, Tomoyuki Terada  |
| 13. Relationship between aging and dosage of warfarin: the current status of warfarin anticoagulant therapy for Japanese outpatients in a department of cardiovascular medicine. (査読付) | 共           | 2009年6月       | Journal of Cardiology 53 (2009) 355-360.                          | 約300床の地域中核病院循環器科において、外来にて継続的にwarfarinを投与されている患者を対象に、その投与量やPT-INRの現状について報告した。多くの患者はPT-INRが安定しており、平均1.99であった。投与量は年齢によらず一定であったが、そのPT-INRは上昇傾向にあった。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。<br>Takeshi Miura*, Toru Nishinaka, Tomoyuki Terada, Kazuya Yonezawa   |
| 14. Investigation of the role of the amino acid residue at position 230 for catalysis in monomeric carbonyl reductase 3. (査読付)   | 共           | 2009年2月       | Chemico-Biological Interactions 178 (2009) 211-214.               | 薬物代謝酵素CBR1に高度に類似した新規酵素CBR3のラットオルソログを単離した。ヒト・ラット・チャイニーズハムスター・マウスにおいてCBR1とCBR3のアミノ酸配列を比較したところ、CBR1のTrp230がCBR3ではrigidなアミノ酸であるPro230に変異していた。これは基質結合ループ領域の最もN末側にあり、ループ形成に大きな役割を果たしていると思定された。しかし、ratCBR3Pro230Trpは、その触媒活性に影響を与えなかった。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。<br>Takeshi Miura*, Yuma Itoh, Masahito Takada, Hideno Tsutsui, Tokihito Yukimura, Toru Nishinaka, Tomoyuki Terada |
| 15. Chinese hamster monomeric carbonyl reductases of the short-chain dehydrogenase/reductase superfamily. (査読付)  | 共           | 2009年2月       | Chemico-Biological Interactions 178 (2009) 110-116.               | 我々が独自に単離したチャイニーズハムスターカルボニル還元酵素群(CHCR1-3)に関して、プロスタグランジン代謝への関与を検討した。その結果、CHCR1とCHCR2はPG 9-keto還元酵素活性を示すのに対してCHCR3はほとんどその活性を示さなかった。アミノ酸相同性と考え合わせると、CHCR1とCHCR2はヒトCBR1の、CHCR3はヒトCBR3のオルソログであると推察された。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。<br>Takeshi Miura, Toru Nishinaka, Masashi Takama, Masahiro Murakami, Tomoyuki Terada*  |
| 16. Different functions between human monomeric carbonyl reductase 3 and carbonyl reductase 1. (査読付)   | 共           | 2008年8月       | Molecular and Cellular Biochemistry 315 (2008) 113-121.           | 薬物代謝酵素CBR1に高度に類似した新規酵素CBR3の遺伝子をヒトcDNAより独自に単離し、CBR1と酵素的に比較した。その結果、CBR3はCBR1に比べて、その酵素活性が極めて限定的であること、補酵素に対するKd値が大きいことを明らかにした。また、細胞内局在性は同様であるが、組織におけるmRNAレベルでの発現は極めて低いことを見出した。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。<br>Takeshi Miura*, Toru Nishinaka, Tomoyuki Terada   |
| 17. Curcumin activates human glutathione S-transferase (GST) P1遺伝子の  | 共           | 2007年3月       | Toxicology Letters 17   | ヒトGlutathione S-transferase (GST) P1遺伝子の   |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称   | 単著・<br>共著書別 | 発行又は<br>発表の年月 | 発行所、発表雑誌等<br>又は学会等の名称  | 概要   |
|---|-------------|---------------|--|--|
| <b>3 学術論文</b>   |             |               |  |  |
| thione S-transferase P1 expression. (査読付)   |             |               | 0 (2007) 238-247.  | 転写制御機構を検討した。HepG2細胞において、GST遺伝子上流336 bpを用いたLuciferase gene reporter assayを行ったところ、CurcuminがGSTP1遺伝子上流域のAnti-oxidant responsive elementを介して転写を正に調節することを明らかにした。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。<br>Toru Nishinaka*, Yusuke Ichijo, Maki Ito, Masayoshi Kimura, Masato Katsuyama, Kazumi Iwata, Takeshi Miura, Tomoyuki Terada, Chihiro Yabe-Nishimura |
| 18. Expression of carbonyl reductase in fetal human brain, but not in adult. (査読付)  | 共           | 2007年2月       | Enzymology and Molecular Biology of Carbonyl Metabolism 13 (2007) 368-378.             | 縮重プライマーを用いて、薬物代謝酵素CBR1に高度に類似したCBR3遺伝子を同定した。CBR3のアミノ酸配列は、Nucleotide-binding motifやActive site、Rossmannfold consensus配列などの重要配列が保存されていた。ヒトCBR3は胎児脳に高発現していることを見出した。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。<br>Hidetoshi Mizobuchi, Takeshi Miura, Kazutake Tsujikawa, Toru Nishinaka, Tomoyuki Terada*   |
| 19. Regulation of promoter activity of the aldose reductase gene through the multiple stress response region, MSRR. (査読付) | 共           | 2007年2月       | Enzymology and Molecular Biology of Carbonyl Metabolism 13 (2007) 360-367.             | アルドース還元酵素の転写制御因子に存在するストレス応答性配列が多数存在する転写制御領域(Multiple stress response region, MSRR)について、その特性を検討した。AREやAP-1 site, TonEBP siteに十分な機能性があることを見出した。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。<br>Toru Nishinaka*, HanGeul Seo, Takeshi Miura, Tomoyuki Terada, Chihiro Yabe-Nishimura   |
| <b>その他</b>  |             |               |  |  |
| <b>1. 学会ゲストスピーカー</b>  |             |               |  |  |
|   |             |               |  |  |
| <b>2. 学会発表</b>  |             |               |  |  |
| 1. 生化学における初年次基礎学力教科教育の運用と評価   | 共           | 2016年8月       | 第1回 日本薬学教育学会大会   | 安井菜穂美 河井伸之 北山友也 西村奏咲 三浦健 中林利克 三木知博   |
| 2. 習熟度別クラスの編成における重回帰分析を用いた新規クラス分け法の検証   | 共           | 2016年8月       | 第1回 日本薬学教育学会大会   | 三浦健 篠塚和正 河井伸之 北山友也 西村奏咲 安井菜穂美 安東由則 三木知博 中林利克   |
| 3. 初年次生に対する基礎学力強化教育の効果測定  | 共           | 2016年8月       | 第1回 日本薬学教育学会大会   | 西村奏咲 来海徹太郎 河井伸之 北山友也 三浦健 安井菜穂美 三木知博 中林利克   |
| 4. Vasodilation effect of nitroglycerin in healthy Japanese who differ on genotype of aldehyde dehydrogenase 2 (ALDH2)    | 共           | 2016年7月       | 18th International workshop on Enzymology and Molecular Biology of Carbonyl Metabolism | Tomoyuki Terada, Takeshi Miura, Toru Nishinaka, Kazuya Yonezawa  |
| 5. 薬理学領域理解度に対する解剖生理学教育の影響   | 共           | 2016年3月       | 第136回 日本薬学会年会  | 北山友也 籠田智美 吉川紀子 河井伸之 西村奏咲 三浦健 安井菜穂美 中林利克  |
| 6. 2015年度薬学部初年次教育(有機化学)における基礎学力強化教育の運用と評価   | 共           | 2016年3月       | 第136回 日本薬学会年会  | 西村奏咲 来海徹太郎 河井伸之 北山友也 三浦健 安井菜穂美 中林利克  |
| 7. 下級学年成績に基づいた成績予測式による習熟度別クラスの判定法の評価  | 共           | 2016年3月       | 第136回 日本薬学会年会  | 三浦健 篠塚和正 河井伸之 北山友也 西村奏咲 安井菜穂美 安東由則 中林利克  |
| 8. 生化学(生体成分領域)における学力教科対象者に対する教育の運用と評価   | 共           | 2016年3月       | 第136回 日本薬学会年会  | 安井菜穂美、河井伸之、北山友也、西村奏咲 三浦健 中林利克  |
| 9. 三年次生への有機合成化学領域における習熟度別少人数講義の効果   | 共           | 2016年3月       | 第136回 日本薬学会年会  | 河井伸之 西出喜代治 北山友也 西村奏咲 三浦健 安井菜穂美 中林利克  |
| 10. 虚血性急性腎障害に対する $\alpha$ 2Cアドレナリン受容体遮断薬の影響   | 共           | 2016年3月       | 第136回 日本薬学会年会  | 林耕平 坂井建樹 下川隆臣 筒居秀伸 三浦健 高間雅志 山形雅代 雪村時人  |
| 11. シスプラチン誘発性腎障害に対するヨヒンビンの治療効果  | 共           | 2016年3月       | 第89回日本薬理学会年会   | 下川隆臣 西村里沙 筒居秀伸 三浦健 山形雅代 雪村時人   |
| 12. 解剖生理学分野における強化教育法による成績への影響   | 共           | 2015年3月       | 第135回 日本薬学会年会  | 北山友也 森山賢治 籠田智美 河井伸之 西村奏咲 三浦健 安井菜穂美 中林利克  |
| 13. アドレナリン $\alpha$ 2C受容体阻害薬(JP-1302)の虚血再灌流による急性腎障害に対する影響   | 共           | 2015年3月       | 第135回 日本薬学会年会  | 下川隆臣 筒居秀伸 三浦健 高間雅史 山形雅代 雪村時人   |
| 14. 薬学部初年次教育(有機化学)における習熟度別授業の効果   | 共           | 2015年3月       | 第135回 日本薬学会年会  | 西村奏咲 西出喜代治 来海徹太郎 河井伸之 北山友也 三浦健 安井菜穂美 中林利克  |
| 15. 生化学(代謝領域)における学力強化教育の運用と評価   | 共           | 2015年3月       | 第135回 日本薬学会年会  | 安井菜穂美、河井伸之、北山友也、西村奏咲、三浦健、中林利克  |
| 16. 有機化学系科目における習熟度別講義の三年次生への運用とその評価   | 共           | 2015年3月       | 第135回 日本薬学会年会  | 河井伸之 西出喜代治 北山友也 西村奏咲 三浦健 安井菜穂美 中林利克  |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称  | 単著・<br>共著書別 | 発行又は<br>発表の年月 | 発行所、発表雑誌等<br>又は学会等の名称  | 概要  |
|--|-------------|---------------|--|---|
| <b>2. 学会発表</b>   |             |               |  |   |
| 17. ホルボールエステルに寄るアルド<br>ーケト還元酵素AKR1B10遺伝子の<br>発現抑制はERK-c-Jun経路を介す<br>る  | 共           | 2015年3月       | 第135回 日本薬学会年<br>会  | 西中徹 三浦健 清水かほり 寺田知行  |
| 18. 薬理学分野における強化教育に対<br>する予備的評価   | 共           | 2015年3月       | 第135回 日本薬学会年<br>会  | 三浦健 篠塚和正 河井伸之 北山友也 西村奏咲<br>安井菜穂美 中林利克   |
| 19. 虚血再灌流による急性腎障害に対<br>するアドレナリン $\alpha$ 2c受容体遮断<br>薬JP-1302の影響  | 共           | 2015年10月      | 第65回 日本薬学会近<br>畿支部総会・大会  | 坂井建樹 林耕平 筒居秀伸 下川隆臣 三浦健<br>高間雅志 山形雅代 雪村時人  |
| 20. アルドーケト還元酵素AKR1B10遺<br>伝子の転写調節領域上の機能性An<br>tioxidant Response Elementの同<br>定  | 共           | 2015年10月      | 第65回 日本薬学会近<br>畿支部総会・大会  | 湯川凌 渡辺賢 松下裕也 眞位佳崇 永山美里<br>小松千希怜 藤谷美沙子 清水かほり 三浦健 西<br>中徹 寺田知行  |
| 21. 虚血性急性腎障害およびシスプラ<br>チン誘発腎障害における $\alpha$ 2受容<br>体アンタゴニストの腎保護効果  | 共           | 2014年7月       | 第57回 日本腎臓学会<br>学術総会  | 筒居秀伸 雪村時人 三浦健   |
| 22. ERKを介したアルドーケト還元酵素<br>AKR1B10遺伝子の発現調節   | 共           | 2014年3月       | 第134回 日本薬学会年<br>会  | 西中徹 岡村明日香 岡本厚志 三浦健 寺田知行   |
| 23. one-stepアフィニティ精製法によ<br>って得られたtag-free aldo-keto<br>reductase (AKR) 1A1の酵素化学<br>的解析   | 共           | 2014年3月       | 第134回 日本薬学会年<br>会  | 安田和真 高田雅仁 西中徹 三浦健 寺田知行  |
| 24. フォルボールエステルによるアル<br>ドーケト還元酵素AKR1B10遺伝子<br>の発現調節   | 共           | 2013年3月       | 第133回 日本薬学会年<br>会  | 西中徹 佐向美帆子 日高千繪美 笹岡千聡 三浦<br>健 寺田知行   |
| 25. シスプラチン誘発性腎障害に対す<br>る $\alpha$ 2受容体遮断薬の効果につ<br>いて   | 共           | 2013年3月       | 第133回 日本薬学会年<br>会  | 筒居秀伸 三浦健 高間雅志 田中亮輔 山形雅代<br>大喜多守 松村靖夫 雪村時人   |
| 26. Regulation of human carbonyl r<br>eductase 1 (CBR1, SDR21C1) gen<br>e by transcription factor Nrf2   | 共           | 2012年7月       | 16th International wo<br>rkshop on Enzymology<br>and Molecular Biology<br>of Carbonyl Metaboli<br>sm | Ayako Taketomi, Takeshi Miura, Toru Nishinaka,<br>Tomoyuki Terada   |
| 27. アルドーケト還元酵素AKR1B10遺<br>伝子プロモーター上のNrf2応答配列<br>の同定と転写調節におけるAP-1の<br>関与  | 単           | 2012年3月       | 第132回 日本薬学会年<br>会  | 西中徹 大谷将之 山下勇樹 中村遥香 鳥本ゆかり<br>三浦健 寺田知行  |
| 28. 転写因子Nrf-2による、ヒト単量<br>体カルボニル還元酵素1 (CBR1) 遺<br>伝子の転写制御   | 共           | 2012年3月       | 第132回 日本薬学会年<br>会  | 武富彩子 三浦健 西中徹 寺田知行   |
| 29. ヒト単量体カルボニル還元酵素(C<br>BR1)は、転写因子Nrf2によって制<br>御される  | 共           | 2012年10月      | 第62回 日本薬学会近<br>畿支部総会・大会  | 武富彩子 三浦健 西中徹 寺田知行   |
| 30. ラット腎虚血再灌流障害に対する<br>内因性モノアミンオキシダーゼ阻<br>害物質イサチンの効果   | 単           | 2011年2月       | 第4回 函館病院臨床研<br>究部大会  | 三浦健   |
| 31. Regulation of Aldo-keto reduct<br>ase 1B10 (AKR1B10) gene expres<br>sion   | 共           | 2010年7月       | 15th International wo<br>rkshop on Enzymology<br>and Molecular Biology<br>of Carbonyl Metaboli<br>sm | Toru Nishinaka, Takeshi Miura, Tomoyuki Terada  |
| 32. ラット腎虚血再灌流障害に対す<br>る内因性モノアミンオキシダーゼ阻<br>害物質イサチンの効果   | 共           | 2010年3月       | 第130回 日本薬学会年<br>会  | 三浦健 筒居秀伸 小淵修平 田中亮輔 山形雅代<br>大喜多守 松村靖夫 雪村時人 寺田知行  |
| 33. The effect of monoamine oxidas<br>e inhibitor on ischemia/reperf<br>usion-induced acute kidney inj<br>ury in rats.   | 共           | 2010年3月       | 第83回 日本薬理学会<br>年会  | Hideobu Tsutsui, Takeshi Miura, Shuhei Kobuchi<br>, Ryosuke Tanaka, Masayo Yamagata, Mamoru Ohkit<br>a, Yasuo Matsumura, Tokihit Yukimura |
| 34. 転写因子Nrf2によるアルドーケト<br>還元酵素AKR1B10遺伝子の発現調<br>節   | 共           | 2010年12月      | BMB2010(第83回日本生<br>化学会・第33回日本分<br>子生物学会合同年会)   | 西中徹 奥村麻奈美 中尾文香 中村遥香 三浦健<br>寺田知行   |
| 35. ラットチオールトランスフェラー<br>ゼの変異導入による機能変化   | 共           | 2010年12月      | BMB2010(第83回日本生<br>化学会・第33回日本分<br>子生物学会合同年会)   | 寺田知行 三浦健 西中徹  |
| 36. Potential targeting region for<br>the specific inhibition of hu<br>man monomeric carbonyl reducta<br>ses of the short-chain dehydro<br>genase/reductase superfamily. | 共           | 2009年5月       | 3rd Asian Pacific ISS<br>X Regional Meeting  | Takeshi Miura, Toru Nishinaka, Tomoyuki Terada  |
| 37. ヒト単量体カルボニル還元酵素群<br>のsubstrate-binding loop領域の<br>重要性   | 共           | 2009年3月       | 第129回 日本薬学会年<br>会  | 三浦健 西中徹 寺田知行  |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称  | 単著・<br>共著書別 | 発行又は<br>発表の年月 | 発行所、発表雑誌等<br>又は学会等の名称  | 概要   |
|--|-------------|---------------|--|--|
| <b>2. 学会発表</b>   |             |               |  |  |
| 38. 単量体カルボニル還元酵素3の触媒活性に対するアミノ酸残基230番の役割  | 共           | 2009年3月       | 第129回 日本薬学会年会  | 伊藤右真 高田雅仁 筒居秀伸 雪村時人 西中徹<br>三浦健 寺田知行  |
| 39. Cloning of rat monomeric carbonyl reductase 3.   | 共           | 2008年7月       | 14th International workshop on Enzymology and Molecular Biology of Carbonyl Metabolism | Takeshi Miura, Yuma Itoh, Masahito Takada, Hide-nobu Tsutsui, Tokihito Yukimura, Toru Nishinaka, Tomoyuki Terada |
| 40. Chinese hamster monomeric carbonyl reductases in the short-chain dehydrogenase/reductase family.                               | 共           | 2008年7月       | 14th International workshop on Enzymology and Molecular Biology of Carbonyl Metabolism | Takeshi Miura, Toru Nishinaka, Masashi Takama, Masahiro Murakami, Tomoyuki Terada                                |
| 41. アルドーケト還元酵素AKR1B10遺伝子の発現調節  | 共           | 2008年3月       | 第128回 日本薬学会年会  | 西中徹、三浦健、寺田知行   |
| 42. Characterization of chimeric enzymes of human monomeric carbonyl reductases in the short-chain dehydrogenase/reductase family  | 共           | 2008年10月      | 第23回 日本薬物動態学会  | Takeshi Miura, Toru Nishinaka, Tomoyuki Terada   |
| 43. Relationship between aging and dosage of warfarin in the Japanese  | 単           | 2008年10月      | 第3回 函館病院臨床研究部大会  | 三浦健  |
| 44. アントラサイクリン系抗癌剤依存的な心筋障害に関わるカルボニル還元酵素1および3 (CBR1, 3) の解析  | 単           | 2007年9月       | 第2回 函館病院臨床研究部大会  | 三浦健  |
| 45. Phorbol esterによるアルドース還元酵素の発現調節機構   | 共           | 2007年3月       | 第127回 日本薬学会年会  | 西中徹、三浦健、寺田知行、Seo HanGeul   |
| 46. ヒトカルボニル還元酵素 (hCBR3, hCBR1) に関する検討 組織分布と酵素化学的諸性質  | 共           | 2007年3月       | 第127回 日本薬学会年会  | 三浦健、溝渕秀敏、西中徹、寺田知行  |
| 47. チャイニーズハムスター monomeric carbonyl reductase (CHCR) の比較解析  | 共           | 2007年12月      | 第80回 日本生化学会・第30回 分子生物学会 合同大会   | 三浦健、高間雅志、村上正裕、佐久間覚、藤本陽子、西中徹、寺田知行   |
| 48. Comparative study of human monomeric carbonyl reductases in tissue distribution, reductase activity, and coenzyme specificity. | 共           | 2007年10月      | 8th International Society for the Study of Xenobiotics Meeting                         | Takeshi Miura, Toru Nishinaka, Tomoyuki Terada   |
| 49. Expression of carbonyl reductases in fetal brain, but not in adult.  | 共           | 2006年7月       | 13th International workshop on Enzymology and Molecular Biology of Carbonyl Metabolism | Takeshi Miura, Hidetoshi Mizobuchi, Kazutake Tsujikawa, Toru Nishinaka, Tomoyuki Terada                          |
| 50. Regulation of promoter activity of mouse aldose reductase (AKR1B3) gene through the multiple stress response region, MSR.      | 共           | 2006年7月       | 13th International workshop on Enzymology and Molecular Biology of Carbonyl Metabolism | Toru Nishinaka, HanGeul Seo, Takeshi Miura, Tomoyuki Terada, Chihiro Yabe-Nishimura                              |
| 51. 抗凝固薬ワルファリンの投与量に対する薬物相互作用の影響  | 共           | 2006年3月       | 第70回 日本循環器学会年会   | 三浦健、広正拓也、石川奈津子、阿保信義、小玉しほみ、川口啓之、遠藤雅之、大谷順一、米澤一也  |
| 52. 胎児脳に特異的に発現するhCBR3 (human carbonyl reductase 3) の酵素化学的性質  | 共           | 2006年12月      | 日本分子生物学会2006フォーラム  | 三浦健、溝渕秀敏、西中徹、寺田知行  |
| <b>3. 総説</b>   |             |               |  |  |
| <b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>  |             |               |  |  |
| <b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>  |             |               |  |  |
| <b>6. 研究費の取得状況</b>   |             |               |  |  |
| 1. 若手研究(B) 継続  | 単           | 2012年         | 日本学術振興会  | 薬物治療をサポートするフラボノイドの臨床応用   |
| 2. 若手研究(B) 継続  | 単           | 2011年         | 日本学術振興会  | 薬物治療をサポートするフラボノイドの臨床応用   |
| 3. 基盤研究(C) 継続  | 共           | 2010年         | 文部科学省  | 遺伝子素因に基づくニトログリセリン生体応答性の客観的評価とその個別医療への応用 (分担)   |
| 4. 若手研究(B) 継続  | 単           | 2010年         | 日本学術振興会  | 薬物治療をサポートするフラボノイドの臨床応用   |
| 5. 若手研究(B) 新規  | 単           | 2009年         | 日本学術振興会  | 薬物治療をサポートするフラボノイドの臨床応用   |
| 6. 基盤研究(C) 継続  | 共           | 2009年         | 文部科学省  | 遺伝子素因に基づくニトログリセリン生体応答性の客観的評価とその個別医療への応用 (分担)   |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称                     | 単著・<br>共著書別 | 発行又は<br>発表の年月 | 発行所、発表雑誌等<br>又は学会等の名称 | 概要  |
|---------------------------------|-------------|---------------|-----------------------|---|
| <b>6. 研究費の取得状況</b>              |             |               |                       |   |
| 7. 第6回 日本心臓財団若年研究者<br>研究奨励（藤基金） | 単           | 2008年         | 公益財団法人 日本心<br>臓財団     | 薬剤誘因性心不全に対する単量体カルボニル還元酵<br>素群の新規薬物標的因子としての関与    |
| 8. 基盤研究(C) 新規                   | 共           | 2008年         | 文部科学省                 | 遺伝子素因に基づくニトログリセリン生体応答性の<br>客観的評価とその個別医療への応用（分担） |

学会及び社会における活動等

| 年月日            | 事項   |
|----------------|--|
| 1. 2015年10月17日 | 第65回 日本薬学会近畿支部総会・大会（大阪大谷大学） ポスター審査委員   |
| 2. 2014年11月    | Elsevier社 Chemico-Biological Interactions誌 Outstanding Reviewer表彰  |
| 3. 2012年10月20日 | 第62回 日本薬学会近畿支部総会・大会（武庫川女子大学） ポスター審査委員  |
| 4. 2011年4月～現在  | 日本薬剤師会 会員  |
| 5. 2011年10月～現在 | 日本プライマリ・ケア連合学会 会員  |
| 6. 2009年～現在    | 学術論文のad-hoc reviewer (Chemico-Biological Interactions、Internal Medicine、BBA-molecular<br>cell research、The Journal of Biochemistry、Clinical Interventions in Ageing、Toxins、Hemat<br>ology Reviews) |
| 7. 2006年8月～現在  | 日本薬学会 会員   |